

日本生命財団・学際的総合研究助成
都市環境イノベーション研究会・第9回研究会
議事録

日時：2017年9月30日（土）14:00～17:30

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 19号館 713会議室

記録：岩田優子＋箕浦豪

出席者（敬称略）：

研究会メンバー

松岡 俊二	早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）・教授
田中 勝也（途中参加）	滋賀大学環境総合研究センター・教授
勝田 正文	早稲田大学理工学術院（環境・エネルギー研究科）・教授
黒川 哲志	早稲田大学社会科学総合学術院（社会科学研究科）・教授
松本 礼史	日本大生物資源科学部・教授

研究協力者

升本 潔	青山学院大学地球社会共生学部・教授
渡邊 敏康	株式会社NTT データ経営研究所・シニアマネージャー （早稲田大学創造理工学研究科博士後期課程）
平沼 光	東京財団・研究員・政策プロデューサー （早稲田大学社会科学研究科修士課程）

日本生命財団

広瀬 浩平	助成事業部部長
-------	---------

オブザーバー

渡部 一樹	株式会社有斐閣・書籍編集第二部
伊東 晋	元・早稲田大学出版部編集長
胡 筈（途中参加）	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
覃 子懿（途中参加）	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
吉田 朗	早稲田大学社会科学研究科博士後期課程
姚 子文	早稲田大学アジア太平洋研究科修士課程
Yan yan（途中参加）	早稲田大学アジア太平洋研究科修士課程
前原 無量	早稲田大学アジア太平洋研究科修士課程
朱 鈺	早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程

事務局

岩田 優子	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
李 洸昊	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
Yunhee Choi	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
箕浦 豪	早稲田大学創造理工学研究科修士課程

報告1ー①：松岡俊二「書籍執筆の進行状況について」

報告1ー②：渡邊敏康「第1章 低炭素社会への模索・飯田モデル：企業・市民・自治体の協働」

討論：

松岡：もう少し深掘りしたい箇所、他の章との関わりを考えたほうが良いと思っている箇所などはあるか。

渡邊：本日、第2～4章の飯田市に関する報告を聴いて、第3節「飯田市における企業・市民・自治体の協働」や第4節「飯田市におけるこれまでの社会イノベーション」のあたりの相互関係を整理できればと考えている。

報告1ー③：升本潔「第2章 市民共同発電事業の展開と社会的受容性の変化：将来への可能性」

討論：

松岡：「脱炭素化」という言葉はあえて使っていないのか。

升本：飯田市の市民共同発電の小さなコマの中で脱炭素化を使うのは言い過ぎなのではないか。ワンコンポーネントではあると思うが、もっといろいろなものを巻き込まないと脱炭素化にはならない。

松岡：将来像としてはどうか。

升本：市民共同発電事業という見方でいくと言い過ぎだと考えた。

松岡：脱炭素化（De-carbonization）を今後使うかどうか、使うとすればどう使うのかを考える必要がある。数年のうちに、低炭素という言い方は必ずしもポジティブな言葉ではなくなってくる可能性がある。

ところで、飯田市の社会イノベーションが展開したときの地方自治体の「密接性」というのは何なのか。

升本：具体例は公民館活動。「場」の議論に近いと思う。

松岡：飯田市において社会的受容性と「場」、協働ガバナンスによって社会イノベーションが創出したことを説明するときに、社会的受容性と「場」、協働ガバナンスだけでは説明しきれずに他のファクターがあるといった議論になるならば、それははっきりさせた方が良い。

升本：全体の流れがあるので「場」に落とし込んでいきたいと考えている。協働ガバナンスはあえて外した。飯田市の太陽光発電事業においては、「場」が収まりが良い。

報告1ー④：平沼光「第4章 地域主体の再エネ活用事業創出：そのプロセスと社会的受容性」

討論：

松岡：第1節の①「協働型（クロス・ファンクショナル型）の協力モデル」というのは、従来の行政の下請けをNPO 市民団体等にさせる形ではなく、おひさま進歩という市民組織を行政が支えていくという理解で良いのか。それが新しい協働の形という意味なのか。

平沼：クロス・ファンクショナルという表現を使うのが適当かどうかは、研究方針や出版方針にあわせるが、そのような意味あいを使っている。

松岡：今後の展開については、升本さんや渡邊さんの章と共通なので、飯田モデルの今後についてどう考えるかはあわせていく必要がある。

渡邊：協働の形については、私の第3節「飯田市における企業・市民・自治体の協働」で紹介をしようと考えている。市民社会と産業社会がある上で、そこには「場」と協働ガバナンスの話が出

てくる。市民発電の話は、「場」の考え方で説明できると考えている。飯田モデルからみたときの「場」とガバナンスの考え方を説明する流れにしようと考えている。「場」を通じた具体的な話は第2章で展開する、といった形で説明しようと考えている。

松岡:協働ガバナンスをどのように使うのか、「場」の議論の整理をどうするのかということは、もっと考えなければいけない。

渡邊:市場、技術、制度という社会的受容性は必要条件だが、それだけでは十分条件ではない。市場を何らかの形でアウトプットするためには「場」が一要素として大事。制度が何らかの形で確立するためにはガバナンスが必要、技術は「場」とガバナンスの両方に関係している、といった説明はできると思う。

松岡:飯田モデルの場合、市役所の役割の問題がある。地方自治体が入る場合、あるいはフォーマルなインスティテューションを作る場合、ガバナンスを使う意味が出てくると思う。オープンイノベーションや社会イノベーションの創発の議論をする場合には、「場」の方が一般性を持つのではないと思う。

平沼:「場」の方がシンプルな説明で済むと思う。「場」と協働ガバナンスの違いは何かをもう少しはつきりさせるとわかりやすい。

報告1ー⑤:松本礼史「第5章 資源循環型社会への模索・掛川モデル:ごみ減量日本一への途」

報告1ー⑥:李洸昊「第6章 行政主導型地域共同アプローチ:行政と住民との協働」

討論:

松岡:5章と6章の関係はどのようになっているのか。

李:6章では、協働ガバナンスに焦点を当てて分析をしていきたい。

松本:掛川市の社会イノベーションの成功要因については6章で書こうと考えている。5章の「協働によるまちづくり」がその土台としてあったからという展開にしたい。

松岡:6章は協働によるまちづくりシステムの分析をしないといけない。それはどのように分析するのか。榛村元市長やまちづくり条例の展開をどのように分析するのか。まちづくりシステムとごみ処理のシステムを分析して、掛川モデルがどのように展開してきたのか考える必要がある。

田中:李さんのデータはなぜ古いものを使っているのか。

李:市町合併の前に焦点を当てている。

田中:古いデータでは、合併によって地方自治体の役割が変わってしまっている、意味のある知見を得られない。新しいデータを使った方が良い。また、ごみは経済活動の副産物なので、人々の生活に関する指標も説明変数に入れないといけない。

伊東:グラフの中の生活系ごみが下がった要因を説明してほしい。事業活動の大きさを入れることによって、経済活動が増えてごみが増えるはずだったものを抑えることができているなどの説明

ができると思う。

松岡:合併後のごみ収集方式の1市2制度は新潟市などにも同様の問題があり、平成の大合併の評価に関わる大きなポイントで、これは6章で議論する必要がある。

**報告1ー⑦:岩田優子「第7章 自然共生社会への模索・豊岡モデル:コウノトリ米の開発・普及過程」
討論:**

松岡:コウノトリ米の開発・普及過程が焦点なのか。

岩田:7章はそのとおりで、8章で湿地という別の生息場所を分析する。水田と湿地という2つの生息場所を増やしたことで、コウノトリの野生復帰、ひいては豊岡市の社会イノベーションに成功したことを社会的受容性と協働ガバナンスというキーワードから分析できると考えている。

松岡:7章は、まず豊岡モデルの全体像を描いてほしい。自然共生社会を通じた持続可能な地方都市あるいは地域社会づくりというのはどのようなモデルなのか、どのように形成され、展開し、持続していくのか、そこにおける問題は何かという内容を書いてほしい。その中の要素として、コウノトリ米の開発・普及があっても良いが、どのようなモデルなのか、どのように形成され、展開し、持続していくのか、そこにおける問題は何かは中核となるクエスチョンなので、しっかりと議論してほしい。書籍全体の中での章の役割を意識するようにしてほしい。

岩田:それについては理解しているつもりである。7章では、豊岡市の今後の展望として、環境と経済の共鳴に関する現状、コウノトリツーリズムなどの観光業や地場産業などの行政支援体制などにもふれる予定である。とはいっても、規定字数を考えると、コウノトリ米の開発・普及を中心とした分析でかなりの比率を割く必要があると想定している。

**報告1ー⑧:黒川哲志「第8章 コウノトリのための湿地の創出・保全と社会的受容性:農地の湿地化と河川改修による湿地の創出」
討論:**

松岡:自然共生社会・豊岡モデルの中で湿地の創出・保全は重要な要素になるが、これがどのような位置づけになるのかは最初に議論をするのか。豊岡モデルの中でいろいろなアクターが絡んだ共創と創発なので、このテーマを書くことの重要性を最初に書いてほしい。7章で豊岡モデルの全体像を書いて、その中の重要な要素の一つである湿地を作ることを8章で書いてほしい。

**報告1ー⑨:松本礼史「第9章 社会的受容性と協働ガバナンス」
討論:**

松岡:「場」と協働ガバナンスの議論をどのように整理するのか。第3節の(1)で、「協働がもたらす社会イノベーション」というより「協働の場がもたらす社会イノベーション」にすると、今までの議論がわかりやすくなると思う。共創と創発を考えたときに、さまざまな地域に関わるアクターが集まってオープンな「場」として形成されることで知識や情報が持ち込まれ社会イノベーションが作られる。9章は、「場」をもう少し重視して書いた方が良い。「場」と協働ガバナンスをどのように分けるかは序章でも考える。最終的には「場」を前面に出して、「場」の一つの形態として協働ガバナンスを考える方が現実的である。

一方、飯田モデルの産業社会では多摩川精機の萩本さん、市民社会では原さんのようなイノベーターの役割が重要であった。飯田モデルはイノベーターがはっきりしている例である。掛川モデルでは榛村さんがイノベーターであったと思う。イノベーターの役割やどのように生まれるの

か、どの程度議論するのかについては考えないといけない。

松本:イノベーターがどのような役割をしたのかについての議論は、そうした議論の必要性や必然性はわかるが、なぜ生まれたかまでを今回の議論に含めると広すぎる気がする。

田中:イノベーターの発生と役割について1章作るのか。9章は第Ⅱ部ではなく序章に入れた方がよい。モデルの説明について7章で話していたが、読み手からしたらほとんどの人が初めてなので序章でこの本の中での協働ガバナンスの説明も入れた方がよい。

松岡:序章でも説明するが、9章ではより掘り下げていきたい。

田中:それならば、この9章のタイトル「社会的受容性と協働ガバナンス」は適切でない。

松岡:序章で3都市モデルのことは書いて、第Ⅰ部では深掘りして第Ⅱ部ではまとめ直して普遍的・一般的なモデルを提示していく。

田中:読み手からするとそのような解釈で読めるようにはなっていないと思う。序章を秋頃に完成させて、各章の担当者が共有し用語や概念を統一して書かないと支離滅裂になってしまうと思う。現時点でコンセプトの共通化もなされていない。

松岡:8割ぐらいは共通化できていると考えているが、それぞれのケースを分析したときに「あふれてくるもの」がある。現実のケース分析で「あふれてくるもの」は、新たな研究の可能性を示す場合もあるので、あまりギチギチにやらないほうが良いかもしれない。

田中:もう少しシンプルにしないとガバナンスと受容性の概念が消化できないと思う。協働ガバナンスや受容性について皆さん違う方向を向いていると思うので、それが統一感のなさにつながっていると思う。

松本:序章とそれぞれのケースの章の整合性はとれていると思う。9章で飯田市、掛川市、豊岡市の社会イノベーションと社会的受容性を3つ並べたときに同じフォーマットで揃えられるのかはやってみないとわからない。第Ⅰ部で書いた分析内容と序章の整合性はとれているが、序章を抜きに考えて横に並べたときに揃うのか。

岩田:今の議論について、私の資料の「0. 書籍全般に関する検討事項」で関連事項を書いているので、少し見ていただきたい。事務局として、皆さんのドラフトをひととおり拝読させていただいた上での所感である。

田中先生のおっしゃる概念の統一について、例えば協働ガバナンスについてのレファレンスは私と中村さんで使っているものが異なるので、同じ協働ガバナンスでも定義やキーワードや方向性や焦点の当て方が変わってくる。

また、本書の理論枠組みは社会的受容性と協働ガバナンスというキーワードをベースにしているはずだが、升本先生のエコロジー的近代化理論(EM)など、他の章では使わない概念がいきなり出てくると、なぜその章だけEMが出てくるのか疑問に思う読者もいると思う。理論枠組みについてフォーマット化する必要があると思う。

分析枠組みについては序章でとりあげるのが良いと思う。社会イノベーションとは何かという

ところから各章を書き始めている人もいたが、これは各章で書く内容ではなく、序章や9章で統一化して明記する必要がある。また、各章で小結論があったりなかったりするが、入れる方が良いと思う。

さらに、今後の展望について、豊岡市のケースでは取りまとめ章である7章に入れたが、逆に各都市の最終章で入れる方がわかりやすいかもしれない。

それから、これは論文ではなく一般書なので、論文のような章構成になっているもの、例えば「分析方法」、「分析結果」などの節タイトルは気になった。

もう1点、今後2月のワークショップや後続プロジェクトを考えていくにあたっては、第Ⅰ部では第Ⅱ部をベースに3都市ケースを深掘りできるように、逆に第Ⅱ部の各章では関連概念の紹介だけでなく3都市ケースについてある程度の分量を割いて分析し、特に共通点についてフォーカスする必要があると感じた。13章の島田先生の章が、3都市の共通点としてのリンキング型・社会関係資本を中心とした書きぶりになっており、最も理路整然としていてわかりやすかった。

松岡:序章で書く社会イノベーションの定義やモデルの基本などを、各章でふまえて書いてほしい。深掘りをする場合にはさらに深掘りをしてほしい。序章はもう一度書き直して送り直すので、これまでの議論や全体像の構成について考え直してほしい。

報告1ー⑩: 渡邊敏康「第10章 技術イノベーションと技術的受容性」

討論:

松岡:第Ⅱ部では、9章と14章が入口と出口になって15章が全体のパフォーマンスを評価する構造になっている。

松本:9章の第3節「協働ガバナンスと社会イノベーション」を残すのかどうか。協働ガバナンスを14章に任せるのであれば、9章のタイトルを含めて考え直す必要がある。

松岡:9章と14章の役割は違う。14章は協働ガバナンスあるいは「場」そのものをさらに深掘りしていく。協働ガバナンスと「場」で、重なってくる側面もあるならばそれをどのように整理するのか。10章は技術イノベーションの話も欲しいと思っている。社会イノベーションと技術イノベーションの関係はどこかで出てこないといけない。

渡邊:ページ数からするとボリュームが多い気がする。

岩田:10、11、12、13章で社会的受容性のことだけを議論するのなら、9章は社会的受容性だけに絞った方がシンプルになるのではないか。

松岡:9章は社会的受容性と「場」、社会的受容性と協働ガバナンスという理論モデルを説明する。序章でも説明するが深掘りをする。

岩田:それでは、その9章のもとで、10～13章と14章が対になるということなのか。

松岡:9章は第Ⅱ部の全体の話をする、10～13章は社会的受容性の4要素を深掘りする。14章はもうひとつの柱である、「場」や協働ガバナンスを深掘りする。

田中:9章を1章にもってきて、今の1～8章を統合して飯田、豊岡、掛川モデルといった長めの1

つの章として3つにして、新しい1章で深掘りした社会的受容性と協働ガバナンスというコンセプトから入り、次に長めに3都市分析をするのはどうか。つまり第Ⅰ部は4章構成にして、第Ⅱ部の各論を今の10章以降のようにすると読み手がわかりやすくなると思う。

岩田:3都市の分析が第Ⅱ部の枠組みをベースにすることを考え、第Ⅰ部と第Ⅱ部を逆にするのはどうか。

渡邊:読み手が行政系の人か社会科学の人かどちらを引きつけたいかにもよると思う。3都市を考えた上で、他の自治体でも参考にして行動につなげてほしいといった話になるならば前半を尊重したら良いと思う。事例ベースで見たいなら第Ⅰ部、理論的なところであれば第Ⅱ部を見てもらうようにしたら良いと思う。

松岡:もともとは、3都市の具体的な話を最初に出して、一般的なモデルの理論化を後にした方が良いのではないかということでこの構成にした。

渡部:前半にケースがある方が良いと思う。3都市の各章を1つにまとめるのは分量や構成的に難しいと思う。また、地方自治体の人で、問題を抱えていて3都市のようにやりたいがなかなかできないという場合に読んでもらう上では、章のタイトルを「AとB」のように並べるだけでは分かりづらい。例えば、「場をいかに作るか」のように変えた方が良いと思う。

報告1ー⑪:渡邊敏康「第12章 社会的受容性と市場的受容性」

討論:

松岡:10～13章は4要素の形でやっているが変えても良いかもしれない。

報告1ー⑫:岩田優子「第14章 協働ガバナンスと社会イノベーション」

討論:

松岡:今日の議論を踏まえると9章は社会的受容性にフォーカスを当てた方が良いかもしれない。14章では「場」から協働ガバナンスになるのか、マクロとミクロのループの議論に焦点を当てるのか。「場」と協働ガバナンスをどのように組んだらどのような社会イノベーションが生まれるのかというのがメインなので、こちらに焦点を当てた方が良い。それをボトムアップ、トップダウン、ミドル・アップダウンという言葉で言うのか。言葉にこだわる必要はない。マクロ・ミクロも面白いが、表1の中で各都市のマクロとミクロと言っていることが、飯田市や掛川市について議論されていることと微妙に違う印象がある。これにどこまでこだわるのか。こだわるとすれば厳密にやらないといけない。今のレベルではマクロ・ミクロにこだわらない方が良いのではないか。

松本:9章を社会的受容性の範囲にとどめると書きやすい。一方で受容性と協働ガバナンスをどこでつなぐのか。10～13章が受容性だけになってしまうと、序章でしかつなげなくなってしまう。

松岡:社会的受容性がそれぞれのアクターの間で受容されるには「場」が必要。「場」があることで、受容が進んでいくという理屈。こうした観点からは、9章の後に14章を持ってきても良いかもしれない。9章は、社会的受容性がどのように作用するのか、そのあとに「場」と協働ガバナンスはどのように組まれて社会的受容性につながるのかという形にしても良い。9章のあとに14章を置いて、さらにそのあとに個別に深掘りしたいテーマとして技術イノベーション、制度、マ

ーケット、ソーシャル・キャピタルなどとそれぞれの関係を議論する配置はどうか。

渡邊:9 章と 14 章を頭に持ってくると、マクロで捉えた時とミクロで捉えた時の社会的受容性の関係も読み手から理解できるし、そのときのイノベーションを形成する時に「場」なのか協働ガバナンスなのかどちらになるのか、それは制度によるものなのか、市場によるものなのかを最初に説明してあるとわかりやすくなると思う。

報告2:田中勝也「協働ガバナンスアンケート 進捗報告」

討論:

- ・アンケートの目的
- ・アンケート調査の概要
- ・質問形式
- ・低炭素社会の実現
- ・分析方法
- ・書籍担当章のアウトライン

報告3:松岡俊二「2月ワークショップと今後の予定について」

- ・第 32 回ニッセイ財団 環境問題助成研究ワークショップについて
- ・今後の予定

事務連絡・ご挨拶

渡部:本日はありがとうございます。活発にたくさん議論していただいているので、書籍も良いものができるのではないかと期待しています。ご執筆いただくのは大変かと思いますが、よろしくお願いします。

広瀬:今回の最後の研究会が 9 回目ということで、その前にはタスクフォースも 3 回されていたということで、これだけ頻繁に熱心にメンバーが一同に会する研究会を積み重ねていただいたプロジェクトは初めてです。また、きっちりスケジュールをこなしていただき、終了時のタイミングで書籍の目次やドラフトを用意して、構成についても議論して整理していただいたプロジェクトも初めてです。あと一年あまりですが、引き続き、よろしくお願いします。

松岡:新しい地域の形あるいは社会の形を示していきたいということで、2015 年 10 月から 2 年間活動を行ってきました。もうあと少しチャレンジしながら、良いものを作っていきたいと考えているので、今後ともよろしくお願いします。

以上